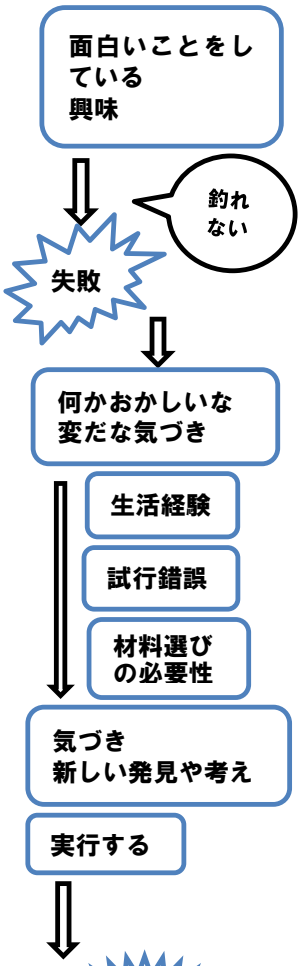
どうしたら釣れる？

この実践は、「５歳児が、魚釣りや製作の中で起きた困ったことや失敗に向き合い、もっと遊びを面白くしたいと、解決方法を考えたり探したり、試行錯誤したりする姿に焦点を当てた事例」です。「水の中に沈んだ魚は、磁石ではうまく釣れない」「新聞紙を丸めた棒で組み立てた物が倒れてしまう」などの失敗や困ったことに直面したことが、子どもの、”「そうだ！」必要感” が生まれる契機になっています。子どもの姿のプロセスを図式化したことで、経験している内容や環境の再構成に加えて、保育者の援助などを振り返ることにもつながっています。

奈良市立六条幼稚園　　５歳児

事例１.「どうしたら釣れる？」

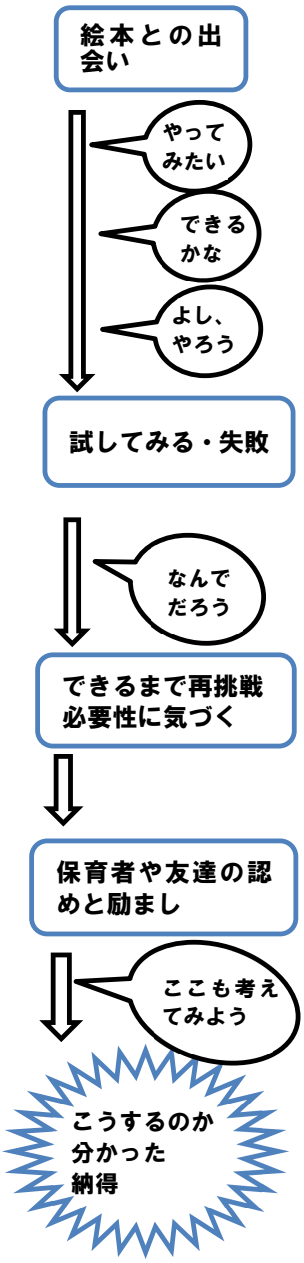


- Ａさんが、水の入ったタライに葉っぱなどのいろいろな物を浮かべて遊んでいたことがきっかけで、魚釣りが始まった。
  発泡トレイ・ペットボトル・牛乳パックなどの身近な素材を使って魚を作った。
- 魚を釣るため、割り箸に毛糸やリボンを付け（釣り糸）、先に自分たちで好きな大きさに切った磁石シートを付けた上で、ゼムクリップを付けた魚を釣り始めた。
- 「魚が取れない」**「難しいなぁ。くっ付かない」などと悪戦苦闘している。**
  保育者は、「どうして釣れないんだろうね？」と、疑問を投げかける。
- Ｂさんは、「**浮いているのは、すぐにくっ付くのに水の中に沈んでいる魚は取れない**」と言う。保育者が、「浮いている魚を釣りたいの？」と聞く。
  Ｃさんは、「魚は水の中にいるから、水の中の魚を釣りたい」と言う。
  Ｄさんが、「**魚が大きいから重いのと違う？魚を小さくして釣ってみる？**」とのアドバイスを聞いて、Ｃさんはその通りに釣る。
- 何回かは釣れるが、釣りにくい様子。Ｃさんは、「**クリップが小さいからくっ付きにくいのかも？」と、魚に磁石を付け、磁石と磁石で試してみる。「水の中だとくっ付くんだけど、水から出た時にはずれる**」と、困っている。
- 保育者が、「磁石以外に釣る方法はないかな？」と、さらに問いかけると、縁日でヨーヨー釣りを経験した子どもが、「**針金みたいなものを曲げて釣ったらいいねん**」と、教えてくれる。そこで、子どもたちと一緒に針金を探し、選べるように何種類か用意した。子どもたちは、やわらかい針金、太い針金の中から、**やわらかい針金を選び、好きな長さに切り、その先を曲げて紐の先に付けた。**
- Ａさん、Ｂさんは、「クリップに針金をひっかけるのが難しいな」と、真剣。
  他の子どもも、「ひっかけるのが大変やな。なんか手がプルプル震える。でも、なんだか面白いな」と、ひっかかると確実に釣れることに満足している。
- 楽しそうに魚釣りをしている様子を見て、４歳児も「入れて」と、やってくる。作り方や釣り方を教えながら一緒に楽しんでいた。困っている４歳児には、見守りながら優しく教える姿があった。

［考察］

- 保育者は、「磁石の特質や面白さが伝わるといいな」と思っていたが、子どもたちの思いは違う方向にいった。しかし、子どもたちのもっと遊びを楽しみたい、面白さを追求したいという気持ちは、いろいろな素材の魚を作る必要性につながり、物の浮き沈みに気づくことができた。さらに、水中から水の上に出る時に魚が外れてしまうことに気づき、水の中の魚をどうすればうまく釣ることができるかを考え、工夫していった。
- **子どもの生活経験からの言葉をきっかけに、何度も何度も挑戦できる時間を確保したり、友達同士で情報交換できる場を作ったりしたことで、遊びが展開した。自分たちで遊びを創ったという気持ちが、満足感と自信につながったと考えられる。また、上手くできたことで自信をもち、心にゆとりができたように思う。困っている４歳児や友達に優しく教え、一緒に遊びを楽しむ姿につながったと思われる。**

事例２.「指に力入れて巻くねん」



・保育室で好きな遊びをしている時、絵本を読んでいたＡさんが、「先生、これ全部、新聞で作れるんだって」と、新聞で作った棒、ジャングルジムのようなものを作っているのを見せる。近くで製作をしていたＢさん、Ｃさんはそれを聞いて、Ａさんの見ていた絵本をのぞきにくる。

・「新聞でできてるって、すごいな」「面白そう」と、話しながら、「先生、新聞ある？作ってみる」と、興味をもっている姿に共感し、新聞を用意して、みんなで作ることになった。

・「いっぱい、棒作ろう」と、Ａさんが巻き始めた様子を見てＢさん、Ｃさんが真似て一緒に棒を作り始めた。その様子を見て、他の子どもたちも一緒に巻き始める。
「いっぱいできたからつなげていこう」と、棒と棒を付けて、持つ役とガムテープで留めていく役に分かれてつなげている。

・絵本と似た形になり、「できた」と、完成を喜び、立体の中を体を小さくして通っていく。「なんか迷路みたいやな」と、一人が通り終わる頃、体が当たった所の棒が折れたり、繋ぎ目で曲がってしまったりして倒れてしまう。「あぁあ、壊れちゃった」「**なんで、倒れるのかな**」と残念がる。

・保育者は、「どうして、倒れちゃったのかなぁ」と、一緒に考える。
子どもたちは、「なんでだろう？」「ガムテープの付け方かな？」と思い、もう一度強く付けたが、それでもうまく付かない。

・「棒の立て方かな？」と、どういう風になっているのかと絵本をじっと見ているＡさん。「もうちょっと大きくしようか」と、**角度を広げ、大きくて広い三角形の形にして、「中が通れるようにトンネルみたいにしたい」と、角度や棒の長さ、空間の広さ、棒を立てる位置などを考えて作る必要性に気づく。**「もう一回、したいな」「僕、通ってへんから、通ってみたい」と、もう１度初めから作る。

・保育者は、「一緒にみんなで頑張ってみよう」と、励ます。
作っていると、Ｂさんが巻いた**何本かの棒を振りながら、「先生、こっちの太い棒の方がフニャフニャしている」と、細い棒と太い棒を比べて気づいた**ことを話す。
一緒にしていたＣさんも、「本当だ、**細く巻く方がいいのかな？太い方が強そうやのに**」と、みんなが細く巻けるように作り始める。「なかなか細くならない」「難しいな」と、困っている。
Ａさんが、「指にギュって力入れて、巻いていったら細く巻けるよ」と、教える。

・**細い棒の方がしっかりすることに気づいた**子どもたちは、「さっきより細く巻けた！」「本当だ、なかなか曲がらない」と、もう一度できた棒をつなぎ始めた。「つなぎ目のガムテープをもっとちゃんと巻かないとあかんのかな？」「**ガムテープいっぱい巻いたら重いからと違うかな？**」と、棒と棒の付け方の工夫を考えた。

[考察]

・ふと目に留まった一冊の本に興味を示し、身近にある新聞を巻いてつなげることで、面白い遊びに変わることに気づいた子どもたち。**作ってみたものの壊れてしまい、“でも作りたい” という気持ちを保育者が受け止めて一緒に考え、もう一度挑戦することで、棒の長さやバランス、角度の違い、立てる位置、新聞の巻き方で強度が変わることに気づいた。また、固くする必要感から、細い方がしっかりすることや、どうしたら固く巻けるかを子ども同士で共有したことで、一緒に完成させることができたと考える。**